ホーチミン善哉（ぜんざい）

まるど八十八

1 プロローグ

　平成十四年の十二月に清作は、ベトナムへ行ってきた。三年以上勤めたら、海外旅行に限り十万円まで出してくれるという職場の制度があり、それを利用して清作は、どこかへまた昔のように行きたいと思っていた。昔、まだ清作が若者だった頃、貯金が少し溜まっては、海外旅行をしていた。少ない休みをなんとかやりくりしては毎年行ったせいで、お金はさっぱり溜まらず、そうして三、四年それを続けたら経済的に苦しくなり、旅行は止めたのだった。
　そのため、今年は不景気のため、そろそろそんな福利厚生は無くなりそうな気配なのだが、去年まではあったので、ほとんどただで、ベトナムという遠い外国にも清作は行けたのである。海外へ行くのは清作にとって十年ぶり以上だった。
　よその国、例えば有給休暇を足してヨーロッパへ行った人やアメリカへ行った人もいた。清作はじつは、有給を足して、昔行ったニューヨークかインドへ行こうと思っていた。ネパールでもよかった。ベトナムは自分的には候補に挙がっていなかったのである。なんか危なそうで。それに、予備知識がほとんど無かった。
　ある看護婦さんが、どうしてもベトナムへ行きたいという。別の介護の先輩も、
「私もベトナム行く」
という。
　清作は基本的には単独行動の好きな人間なので、ひとりでネパールにでも行こうかと思っていた。というのは、ＪＲ天王寺駅と近鉄阿部野駅をつなぐ陸橋のうえで、露店をやっているネパール人の怪し気なお兄さんがいて、彼からネパールのお面を買ったり、また、変な将棋のようなネパールのゲームを買ってもいた。やり方を教わるためにいっぺん、その将棋みたいなのを二回やったが、二回とも全然負けてしまった。ほかにもいろんな民芸品をその陸橋で買ったので、ネパールに興味はあった。彼はネパールの横笛も売ろうとして吹いてみせた。ちゃんと音が出るのである。清作も吹いてみたが、さっぱり音が出なかった。売り物を吹いていたのだろうか？　よく思い出せない。将棋はうまいわ、笛は吹けるわ、日本語は喋るわ、器用な男だった。いまでもそこで商売していると思う。
　その、看護婦である滝井さんと、介護の佐伯さんに、ベトナムへ行きたいのだが、どこかいい旅行会社はないかと相談されたので、適当に清作は旅行会社を探して、どこの旅行社にしようかなあとか思っているうちに、清作もベトナムへ行くということにいつのまにかなっていて、その旅行会社で、『ホーチミン五日間』のツアーに三人で行くことになった。それで、相手二人は女性だし、清作は男性だし、清作は一人部屋を予約しようと思っていたら、おんなじ部屋に泊まったらいいやんと言う。そのほうが安いでという。あらかじめ言うといて、ベッドもう一台部屋に持ってきてもらったらいい、などと二人は言う。
　そこまで倹約せんでええやんか、十万出してもらうだけでも儲けもんなんやから、あと、三泊で追加料金、占めて二万ほど払ったって、自分が払うのはその二万円と、小遣いだけなんやから。だいいち、ホテルの部屋の風呂に入るときどうするんや？　などと考えた。かなわんなあ、と。誰かが部屋の外に出たりして待っとくとか、面倒くさいやんかあ、と。
　女性ふたりで大手の旅行会社、阪急交通社とか、近畿日本ツーリストだとかを当たったのだったが、ベトナムは意外な人気で、十二月の初めという、行く人が少なそうな（したがって旅行代金も安い）時期を予定しているにもかかわらず、もう空きがないと

いう。　しかしもう十月なので、申し込みは急がないといけない。彼が十年も前、インドやニューヨークに行ったとき利用した、安い中小の旅行会社に当たってみた。すると、まだあるという。ハノイとホーチミンと行き先はふたつあった。パンフレットを見ると、水上人形劇をハノイではやるらしい。面白そうだな、などと清作は思い、あとで、女性二人のうちのひとり、介護の佐伯さんにどっちがいいか聞くと、「なんか、ハノイは田舎くさくて、買い物するとこ無くて、水上の人形劇とか、そんなのしかないらしいよ。だからホーチミンにしようよ」
　という。そうやね、そんならホーチミンで申し込んどく、ということになった。

2 ベトナムへ

　ホーチミンには偶然、清作の職場の総婦長さんの友人が住んでいるという。なにかと世話をしてくれるので頼んだらいいと、総婦長はいう。しかし、いいのだろうか。
　そんなある日、清作がしごと、休みの日に総婦長から電話がかかってきた。じつは、ベトナムにパソコンを持っていってほしいという。その日は清作は用事があったのだが、なんとか早く切りあげて、夕方、病院の総婦長室へ行くと、池田総婦長がいて、段ボール箱ふたつを指し示した。えっ、ひとつのはずが？　見ると、電気掃除機の入った段ボール箱と、ノートパソコンの入った段ボール箱である。
「これを届けてほしいのよ。ホーチミンでは、分からないことがあったら、ホアさんに相談したらいいからね」
「いや、どうも、ありがとうございます。ところでえ、ガイドブックを少し読んだのですが、ベトナムは最近、治安が悪いとか。どろぼうがいて、危ないとか」
「大丈夫、大丈夫」
　本当に大丈夫なのかなあという不安を胸に、清作は、職場の仲間の女性二人と、十二月のはじめ、関西国際空港へ向かった。旅行会社のひとからチケットを受け取り、ゲートへ。ほんとうは一人旅のほうが気が楽なんだが。相手二人は、それぞれ旦那と、大きな子供が二人とか三人とかいる。清作は、中年のひとりものである。
　関西国際空港はすごく大きな空港である。無事三人待ち合わせはしたが、お金、ベトナムで盗られたらいけないので、Ｔシャツとおなかのあいだにウエストポーチをしていて、お金を出すときにお腹をめくらなくてはいけない。空港使用料か何かで支払いのとき、
「きゃー、もう止めてよう！」
　と、介護の先輩の佐伯さんに言われてしまった。
　ホーチミン国際空港へ向かうベトナム航空機のなかで、清作は、せっかく窓際の席だったのだが、連れは女性だし、席、替わってあげたのだった。なかのほうの席にいると、正面で映画を見られることもあるが、今回は映画もないような気配だ。そうして、長いこと飛行機に乗っていると、
「あ、ほら見て、あそこ！」
　とか、下になにか面白いものが見えることがある。
「ただいま、飛行機は中国、揚子江上空を通過しております」
　とか。
　ホーチミン市が近づくと、飛行機も下降してきて窓の外はメコン川やら、面白い景色が展開されているようである。

　もうすぐ着くのだなと思った。窓際の二人はなんやかやと言いながら窓の下を見てはしゃいでいる。ビデオを廻しているひともいた。さっぱり知らない異国に着く期待と同時に、誘われた者のものぐさというか、最初から期待と興奮で行く国ではないからか、もうちょっと飛行機に乗っていたいとも思った。慰安旅行でもそうだが、清作は、バスに乗っていてひとりのんびり寝るのが好きである。だから海外はやっぱり、飛行機に乗っているのは長い方がよい。乗り物酔いは飛行機は、あんまりないし、なにしろ、ぼおっとしていても食事が出る。そうして誰かと喋ったりせずに誰にも気を使わず寝ているのが好きなのだった。ホーチミンまでは、大阪から六時間である。乗っているのはベトナム航空機で、えんじ色のアオザイを着てスタイルのいいベトナム人スチュワーデスがたくさんいる。
　それでもなんとか無事に三人がホーチミンに着き、冷房の効いた空港から外に出ると、飛行機に乗っていた人を迎えに来た人達がいっぱい待っていた。十二月というのに日本の真夏のような暑さである。長袖を着ているベトナム人は誰もいなかった。清作はＴシャツのうえに長袖のジャケットをはおっていたが、暑くてしかたがない。それと、日本の夏同様、湿度が高い。旧型のワゴン車が何台も迎えに来ていて、これがインドシナ半島なのだな、海外に来た、という感動がじわじわと沸いて来た。
　旅行会社の手配した三十代くらいの女性の現地案内員が来ていた。と同時に総婦長の手配したベトナム人女性ホアさんも来ていた。ホアさんは三十過ぎくらいに見えた。ホアさんに清作は掃除機とパソコンを渡し、なにかあったら言うてくださいねとホアさんは流暢な日本語で語り、小型のオートバイに荷物を積んで帰って行った。
　空港はホーチミン市郊外にあり、かなりの距離をワゴン車は走った。ホーチミン市に入ると、オートバイが目立ってきた。清作はワゴン車のいちばん後ろに乗っている。清作と同行の二人の女性はひとつまえの座席、ツアーが一緒の、若い女性二人連れがいちばん前の座席、現地案内員のドンさんが助手席に座っている。相棒二人は、使い捨てのフィルムがカメラにもなっているやつでさかんに撮影している。清作はいい一眼レフを持ってきていた。二人は後ろの清作を振り向いて言った。
「堂山さん、ほらほら、写真撮ったら？」
　車内から見ると、赤信号で道幅いっぱい、十列くらいに並んでいるバイクの列があった。
「すごいなあ」
　日本でいうと原付くらいか、それに毛の生えた程度の大きさのバイクに二人、三人がまたがっている。四人乗りのバイクさえあった。しかも、バックミラーがない。市内のバイクの多さには驚いたが、お互いすれすれみたいな交通をしていながら、バックミラーもないのに、不思議とぶつからないのだった。夕方のホーチミンを、清作たちを乗せたワゴン車はホテルへ向かった。
　たった十万円で、ホテル滞在中の三日間は皆、朝食つき、フランス料理のディナーまでつく日もありぃの、東南アジアを代表する河を下る『メコン川クルーズ』はあるは、昼食やら夕食やらも何回かついて、いいのだろうかーと恐縮するような、そんな豪華な『サイゴンホテル』に着いた。もちろん、お金をだせばもっとすごいホテルはあるだろうが、旅費も全部こみで十万円で、繁華街のすぐ近くでこのホテルは、安い！　といえるのである。そのへんはお金にはきっちりしているおばちゃんらと旅を申し込んだおかげでもあろう。とはいうものの、ひとり者の清作もいつのまにか四十の坂もとうに越え、年令不詳である。白髪が目立つので年かなとも思われるが、若いようにも見える。
　でも、さきにも書いたが、彼女らは旅に行く前、清作に、同じ部屋に泊まろうと言っていた。そのほうが宿泊費が安くなって、どうちゃん（清作のあだ名）もええやろ？　という。
　しかし風呂に入るときどうするんや？　と、すぐに清作は思った。それに、いくらいい人たちとはいえ、ひとりで本を読むようなタイプではない、この活発な女性らと、ずうっといっしょというのはどうも。清作のほうはと言えば、上品ぶるわけではないけれども、ひとりで過ごすのが好きである。それに、女性ふたりのまえで、ちんぼうとかも見せて無防備に裸でごろんとするわけにもいかんし。やっぱ、ひとりで泊まらんとたまらんわいと思った。
　が、ふたりは、ええやないかいっしょに泊まろうと言う。看護婦の滝井さんは、清作もいっしょに夜勤したことが何回かあるが、夜勤でも仕事がひまなときには四方山話を朝までして、寝ないのである。今回の旅もそんなことになってはなあ、とも思った。ホテルに言ったら、簡易ベッド貸してもらえるでたぶん、と滝井さんは言った。　が、なんとか理由をつけて、
「いびきがひどいからね」
　などと言い、断ることが出来たのだった。
　果たしてホテルに着いて、一緒に泊まるの断ってよかったあー、と思った。大きな二人部屋に、ひとりでいるのは格別である。テレビをつけてもベトナムのニュースなどで、さっぱり言葉が分からないが、なんとＮＨＫも映り、なにか、ドラマをやっている。
　大きなベッドに寝そべったあと、風呂に入った。そうしていろんなことを彼は回想した。
『そういえば、前回海外旅行をしたのは十年以上まえだったような。あのころはまだ自分もまだ髪が黒々としていた。そして、まだアーチストになる夢を追いかけてもいた。
　仕事なんか二の次だ、わいは、絵描きになるんやーっ、などと思っていた。でも、仕事をいくつか替わり、ろくに絵を描かないまま、作品は溜まらず、ストレスだけが溜まり、いろんな、ドツボなことがあり職を替わり時間を何年も無駄にし、親が喜ぶようなことも何もせず、出来ず、そうして‥‥』
　部屋のドアをどんどんと叩く音がする。ドアノブをがちゃがちゃまわす音まで聞こえてきた。清作は風呂に入るとき、部屋のカギをかけていたのだった。
「堂山さあーんっ、食事行こうよーっ！」

「はいはい、ちょ、ちょっと待ってえーっ、わるいねえーっ。お風呂入ってるんでえ」
　急いで風呂から上がる。
　廊下の向かい側にある二人の部屋に行くと、女性らしく荷物が小奇麗に片付けられている。
「ホアさんに電話してよ」
　と介護の佐伯さんが言うので、総婦長からもらっていたホアさんの電話を部屋からかけた。ところで、なんでホアさんにかけるのか分からないまま、ホアさんが電話にでた。
「ハロー」
「あ、もしもし、ホアさん？」
ホアさんは日本語が流暢だと総婦長から聞いていた。そう言えば空港でも日本語が達者だったな。
「あ、はい」
「あ、あのうー」
　と、佐伯さんらのほうを伺う清作。「どこかいいレストランがあるか、案内たのんでよ」
　と佐伯さんが小声で言う。
「あのね、どこか安くて旨いレストランありますか？　案内してもらえますか？」
「はい、わかった、あのね」
　ホテルのロビーで待ち合わせ、ホアさんがやって来た。ごめんね、急に呼び出してとか、日本女性二人は言いながら、夜のホーチミンのまちに四人は出かけた。レトロな、ヨーロッパ風の建物が、ネオンの明かりに浮かんできれいである。ここが旧サイゴンか、と、歩きながら清作は感慨に耽った。
　ホテルからふた筋ほど歩いたら中華風のベトナム料理の店で、食べやすいとホアさんがいうところのレストランに着いた。店内の大きな窓からは、外を歩く大勢のひとやバイクの群れが見える。それほど広くはないが、客でごったがえしている店である。ベトナムのうどん（フォー）やら焼きそばやら、カレーも食べたが、辛くなく、とても旨かった。ホアさんはおかゆを注文した。おかゆはベトナムではけっこうレストランにもよく置いてあるメニューのようである。
　ひととおり、めいめいどんな仕事をしているとか家族の話などをした後、わたしいくつに見える？　と滝井さんがホアさんに尋ねた。おせじなのか本気なのか、ホアさんはおかゆを食べる手を休めて、
「さんじゅうー、ええーとう？」
「あたしもう、二十なんぼの子供がおるねんでえー」
「へえーっ！　そんなにみえないよう」
「あたしはこどもが三人いてね」
　などと佐伯さんも言う。ホアさんは見たとこ三十才くらいで、赤ん坊が一人いるという。
「目がね、大きくてかわいいです」
「そうやね、ホアさんはね、目が大きいから子供さんも可愛いと思うわ」
　ホアさんはたしかに目は大きいがそないにい、‥‥どちらかいうと丸顔でいなか風のお、などと、清作は自分のことは棚にあげつつも思いつつ、ふんふんと相づちをうっていると、日本女性のどちらともなく
「このひと何歳に見える？」
　と清作を指さした。焼きそばを盛った大皿がやって来た。
「ええとうー、さんじゅうー、あのおー」
「どうちゃん良かったなあ」
　と滝井さんは言い、
「ちゃうちゃう、そんな若ない」
　と続けた。
「チャウチャウて、え？」
「ちゃうちゃうて、『違う』ていう意味なんです」
「あ、そうですか」
「いくつに見えます？、このひと」
「も、いいからいいから」
　と清作が言うも、話題は清作の話で盛り上がる。ビールも運ばれて来た。いろいろ言われた後、
「ええ人紹介してやってえな」
「はい分かりました」
　ということになってしまった。別に、頼んでないのになあ、と思いつつ、清作は生返事しつつその場は終わった。
　日本人三人でホアさんには案内のお礼として食事をおごった。たくさん食べてお酒飲んで、四人全部の合計が二千円前後で済んだのだった。
　更にショッピングセンターに案内してもらったが、道路を横断しようにも、信号が少なく、夜でもバイクがいっぱいで、横断するのにはコツが要った。ホアさんのあとについて横断する。コツは、『急な動きをしないこと』である。こっちが落ち着いてゆっくり横断すれば、バイクのほうで見ていて、減速してくれるのだという。
　そうして、サイゴンセンターという大きなショッピングセンターに着いたら、レジにエキゾチックな美人がいた。
　ちょっとタイプかなあー。と思いつつも、日本の二人はラーメンやらをいっぱい買っている。夜食のカップラーメンを、日本にいたときの打ち合わせで、各々買ってきていた。つまりベトナムでは口に合わないものが多いだろうから、日本のカップラーメンやらカップうどんを持って行こうという滝井さんの提案だった。
「ぜったい夜、お腹空くからな」
　と滝井さんは言うのだった。ここベトナムの旧サイゴン、ホーチミンにも日清の『きつねどんべえ』があった。でもなあ、と清作は思う。ホーチミンまで来て『きつねどんべえ』てなあ。ベトナムのカップラーメンも二人は買っているので清作もまた、日本のとベトナムのと両方、カップラーメンを買うことにした。
　レジがそのショッピングセンターには二つあり、かたいっぽうのレジのひとが、エキゾチックなひとで、そのひとにレジを打ってもらい、長ーいレシートをもらった。たくさん買ったからである。ビールなんかも買ったので、荷物がすごく重たくなってきた。
「良かったなあ、どうちゃん、ベトナムのひと紹介してもらえることになって」
「うーん、そうやなあ、ま、ありがとう」
　ホテルに帰り、そんな会話を三人でしつつ、さてラーメンのお湯をどうしようかということになった。またしても頼まれやすいのか、フロントには清作が行くことになった。お湯は英語で『ホットウォーター』やったなと思い出しつつ、フロントにお湯を頼むと、魔法瓶を持って、制帽をかぶった恰幅のいいホテルマンがやって来た。佐伯さんがチップにと五百ドン（日本円で約五円）を握っていて、渡そうとしたが、ホテルマンの目に入らなかったようである。で、先ほど買って来た日清の『きつねどんべえ』を渡すと、受け取って帰って行った。
「やっぱ、五円は失礼やったか、五百ドンには見向きもせんかったな。どんべえ持って帰りよったな」
「やっぱし、たった五円は失礼やで、なんぼベトナムでも」
　と、二人でえらい笑いこけている。そうやねえ、と、清作も、ベトナムのカップラーメンにお湯を入れつつ相づちを打つ。「どんべえ」はいいのだが、このベトナムのラーメンのほうは、熱いお湯を入れても麺がなかなかほぐれず、かたいままなのだ。おかげで、翌朝お腹がもたれてしまった。

3 ベトナム2日目、クチトンネル

　翌朝はホテルのいちばん上の階でバイキング形式の朝食をとった。これも旅行代金に含まれているのだから有り難い。ひろい食堂にはいくつも大きな窓があり、そこからホーチミン市街が眺望出来る。朝日を浴びて輝くサイゴン川が、眼下の町並みの向こうのほうに見えた。けっこう広い川で、船が二、三隻浮かんでいる。
　川は朝日を反射して銀色に輝き、船がそこをゆっくり進む。景色がとても美しい。これは絵になるなあと思った。昔は絵描きになろうと思ってもいたのだが。

　三人は『クチトンネル』半日観光へ向かった。クチトンネルはホーチミンの北西七十キロのクチにある地下トンネルで、ベトナム戦争時、北ベトナムの解放戦線（ベトコン）が、アメリカ軍の爆撃から身を守り、ゲリラ活動の拠点にしていた、全長二百五十キロにもおよぶ、蟻の巣のような精巧な、とんでもないすごさのトンネルである。
　ワゴン車は三人と、このツアーの現地案内員ドンさんを乗せて郊外へ走った。道路脇にはフランスパンの屋台が何軒もあった。車やらバイクの排気ガスを被ってるが、パン、野ざらしでいいのかなあ、とも清作は思った。それと、バイクは相変わらず三人乗りなどが多いのと、それに加えて、バイクに乗っている人は、口にスカーフを巻いていることが多い。排気ガスがかなり深刻なのだろう。バイクは郊外に行っても多いが、街の中心部は歩行者が多いのでスピードが遅かったが、郊外で、このワゴン車と一緒に走るバイクはみなかなりとばしている。
　もっと車のなかでぼうっと寝ていたいと思うころ、車はクチに到着した。映画をやっているという建物に案内された。なかに入ると、パイプ椅子がたくさん並べてあって、けっこうな人が入っている。どうも、皆日本人のようだ。年輩の夫婦連れもいれば若い人達もいる。正面に古そうなテレビが置いてあり、清作らが入ったときにはビデオ映画の終わりごろで、三人の若いベトナム女性が盆踊りみたいなのを踊っているところだった。それが終わると若いベトナム人女性職員がビデオを巻き戻しに来た。
　ぞろぞろと客が入れ替わり、清作らも空いているパイプ椅子に座った。そのビデオが、ベトナム戦争のこと、そしてこの町にあるクチトンネルの、蟻の巣みたいな壮大でものすごい構造を説明していた。全長二百五十キロ、こりゃすごい。まったく、これは、世界にあまり知られてはいないが、万里の長城に匹敵するくらいの、えらいもんやでこれはあ、と清作は思った。蟻の巣の全長なので、見た目には長くは見えないが、計るとそれだけ長いのだろう。世界遺産に登録してほしいくらいである。
　その白黒の映画は、いかにアメリカの横暴な物量による攻撃を、ベトナム解放戦線が、耐えがたきを耐え、ついにアメリカ帝国主義を追放することに成功したかについて、日本人にわかってもらいたいのう、という気持ちが切に出ていたものだった。　ナレーションも日本語である。映画の最後は、アメリカの度重なる攻撃にも関わらず、わがベトナム民衆は収穫のお祭りまでする心の余裕を失ってはいませんでしたと、ベトナムの美しい、顔のちっちゃな娘さんが三人、着物みたいなのを着て盆踊りのような踊りを踊っていた。
　出来ればカラーのほうが良かったか、それと、こんな古そうなちっちゃなテレビ画面でなく、大きなスクリーンなら迫力倍増なのだが、とも思われた。
　映画を観て、お手洗いに行ってから車にのって何十分か走り、いよいよトンネルへ。トンネルのある場所に着いて、ドンさんの案内で、林のなかに入る。木がいっぱい生えている。地面に糸が張ってあって、足がそれに当たると「パーン！」という音がして驚いた。地雷を再現しているのだという。
「わ、バナナがなってる」
「ほんまや」
　先を歩いていた女性二人が言った。
「え、どこどこ？」
　いちばん後ろをのんびり歩いていた清作が、まわりにたくさん生い茂る木を見回すがどれかわからなかった。地面には落ち葉がいっぱい落ちている。ちがうところでバナナのなっている木を見つけた。とうとうクチトンネルの入口までやって来た。ひと一人がやっと入れる大きさの、落ち葉で隠された落とし穴みたいなところにまず滝井さんが入り、そのあと清作が入ってみた。体重重いからやめときと二人に言われたが、いっぺん入ってしゃがむと、横穴が見えた。そうして立ち上がり、なんとか両手を突っ張って、地面に這いあがった。
　置きっぱなしの戦車が林のなかにあり、それにまず滝井さんがよじにぼった。
「滝井さん、身軽やねえ」
　と佐伯さんが言う。ついでほかのふたりも戦車によじのぼり、記念撮影をした。滝井さんが、
「蛇おるから気いつけや」
　という。
「え、どこどこ？　あ、ほんとだ」
　と佐伯さんは言い、気をつけてよじ登った。清作も蛇の場所を聞いた。
「ほら、ここここ」
　と、戦車から下りた滝井さんは言う。
「え？」
「ほら、あそこ」
　そばで観ていたドンさんも、
「あそこですよ」
　と、戦車の途中のくぼみを指さして言った。
　清作は、分からないまま
「ふうーん」
　と言って、戦車によじ登った。
　それからさらに林を進むと、また別の横穴があり、小さい横穴を三人は這うように進んだ。先頭の滝井さんがいちばん小柄で、福岡だか大分だかの田舎育ちということもあり、するするっと横穴（これが狭くて暗くて）を抜けた。二番目の清作も、後ろの佐伯さんもひいひい言いながら横穴を抜ける。と、
「滝井さん素早いなあ。あ、こうもりや」
　と、佐伯さんが言った。横穴を抜けたところも薄暗いところで、半分は屋外に面しているのだが、横穴から出たところは穴の続きみたいになっている。
「あ、ほんまや」
　と、滝井さんも気がついた。
　このときも清作はこうもりを発見出来ずじまいだった。ベトナムのへびもこうもりも見られなかったとは‥‥。

　旅行代金に昼食、夕食がその日は含まれていた。それはクチトンネルから帰ってホーチミン市内でのことで、こうもりのところで止まっていたのでそこから書くと、木のテーブルが置いてあるところで三人は急須に入っているお茶を飲んだ。ちょっと烏龍茶に似ている。こうやって林のなかでお茶を飲むのもおつなものだが本当はゆーっくりお茶を飲んだりしたいのだが、いろいろとスケジュールを用意してくれているツアーなので次に移らねばならない。旅行行くまえの打ち合わせで、
「行くところ、こっちで考える必要がなく、いろんなところへ案内してくれるツアー探してよね」
　と、佐伯さんが言うのでいろんなところ案内してくれつつ、安いツアーを清作は選んだのだった。
　いままで清作が行ったことのある海外旅行は、ほとんどが『ニューヨークフリータイム七日間』みたいなのだった。ニューヨークの繁華街にあるマクドナルドで、長時間ビッグマックを半分くわえたまま、考え事をしていたこともあった。とはいうものの、少ない日数なのだからいろんなとこ行かにゃ損、というのも理屈ではある。
　午前中のクチトンネルからホーチミン市街へ帰って来た一行は、ドンさんの案内でホーチミン市街を観光した。ベンタイン市場という大きな市場は、あとで知ったのだが、生きのいい魚も売っている、また、日曜雑貨もあるところである。いろいろと押し売りにもあった。なかなか客を離さず、買わそうとするのである。
「もう一、買おうとは思うけど、あんまりしつこく買わそうとされたらかなわんわ」
　と佐伯さんがぼやいている。しかしじつは、清作には免疫があった。むかし、インドのデリーへひとりで行ったとき、押し売り

の程度がこんなものではなかったのだ。二、三メートル歩いただけで、もう、行商人が押し売りに来た。だからまだ、ましなんだと思った。が、二日ほどのち、ひとりでホーチミン市街を歩いたとき、デリーとさして違わなかったのだということを見通し甘かった、アジアは、なめたらあかん、どこも、ということを清作は思い知らされることになる。
　ベトナムの食器を清作は以前から気に入っていた。食器をいくつも買うと、ショルダーバッグがどんどん重くなっていった。あとのふたりの荷物も重くなっていっているもようである。　清作はカメラで市場の様子を撮ることにした。Ｔシャツ（サイゴン、とかホーチミンなどと英語で書いていて、イラストの入っているやつ）を買った店で、写真を撮らしてもらうことにした。みたところ日本人とおんなじというか、昔懐かしい日本人、ていうような容貌のひとたちが多い。じっさい行ってみると、ベトナム人て、日本人によく似てるなあと思った。
　カンボジアの、あのポルポトの時代を描いた映画『キリング、フィールド』で見たカンボジア人は、日本人とはちょっと違う「東南アジア人」顔と思っていた。カンボジアはベトナムのすぐ近所なので顔つきも同じような筈だと思うのだが、ベトナム人て、日本人そっくりやなあと思った。
　そういえば、日本人は約一万年前の縄文時代、ベトナムから海路やって来た人々がいるということである。それが日本人のルーツのひとつでもあるという。
　Ｔシャツを買った店でカメラを構えると、二人の若い女性の店員さんのうちのひとりは両手の指を二本出して、カニみたいに、ピースサインをした。
　あと戦争記念館とか、ヨーロッパ調の大きな教会を見たりして、昼、夕食もついてた観光も終わり、ホテルに戻った。
　ホテルは繁華街のどまんなかにあるので、三人でそのあと、町を散歩した。屋台のＴシャツは安くて良かったのだが、天秤棒を担いだ行商人も多い。
　清作ら一行が、市内中心部の噴水のある公園の、石のベンチで一息ついていると、笠をかぶった行商人のおばさんが目の前までやってきて、ベンチの天秤棒を下ろしてしゃがんだ。
「無視しとき無視しとき。ボラれるで」
　小太りの行商人のおばさんに気づかれないようにか、ひそひそ声で佐伯さんがいう。
　天秤棒のお皿を覗くと、魚の形をした焼き菓子がいくつも載っている。うろこの形にこげめがついていて、いわゆるタイヤキより小振りで、タイヤキみたいにダサくなく、もっとあか抜けた、というのでもないけど、とにかく旨そうで、形が面白い。
「こんなん食べたらお腹こわすで」
「お腹こわすこわす」
　二人は意気投合して言い合っているが、ベトナムの笠（山がたの、編笠）を頭に被った、ぽってりしたおばさんはそんな会話など知らず、目の前にまだしゃがんでいる。が、三人がどうも相手にしない様子なので、撤退していった。
　たしかに『日本人は食べるとおなかをこわすかも』と、ガイドブックに書いてあった行商のお菓子ではあったが。でも、はるばるベトナムまで来て、行商人の食べ物を食べないとは勿体ない。清作は密かに夜、相棒の彼女らと部屋のまえで別れたら、行商人の売り物を食べてみようと計画した。
　ホテルに戻り、
「それじゃあ、ちょっと早いけどお休み」
　と清作が言うと、
「おやすみ」
　うまいこといった。ふたりと部屋のまえで別れ、ようし、ひとりでささやかなホーチミン探検じゃ、と清作は、中古で買ったニコンの一眼レフを肩にぶら下げて、ホテルの玄関を出た。時計は午後九時半である。
　やっと自由になれた。よーし、どこへ行こうかと考え、バッチャン焼の店を三人で歩いていたとき見つけ、充分見られなかったので、そこへ行くことにした。バッチャン焼は、清作がベトナムへ行くずっと以前から気になっていた陶器で、何百円くらいからある、ベトナム特有の食器である。しかし、こうやってバッチャン焼の故郷の国へ来てみると、ベトナムへ来るのは必然だったのか、などと変なことも思った。バッチャン焼の店は二階建ての小じんまりしたところで、天井がばかに低く、頭がつきそうである。そこを冷やかした後、さきほどの噴水の広場に向かった。
　しかし、ひとりはなんとなく心細い。なんか、災難にでもあったら、
「ええーっ、そんなとこひとりで勝手に行ってたのー？　だからそんな災難にあうんじゃないさ」
　などと二人に言われそうである。
　広場に来たが、夜も更けたためか、行商のおばさんはいなくて、若い男女がちらほら噴水のところにいる程度である。広場のまわりの道路では、相変わらずバイクがたくさん走っている。　道路をもと来た方へ渡り、歩道沿いに歩いて、飲み物の屋台に通りかかった。スナック菓子やミネラルウォーターも売っていた。ミネラルウォーターを買おうとして、なぜかビールに手が伸びた。緑の缶のハイネケンビール。一万ドン（約百円）だという。ボラれてるのかもしれないが。　売っているおばさんの写真を撮らせてもらった。大阪の商店街にいるようなかんじのひとである。
　さっきから気になっていたが、なんだかへらへら笑いながら、六十代か、もっとか？　くらいの、白髪のおじさんがずっとついてきていた。自称チャイニーズで、やたらと「フレンド」を連発している。
　とくに用事はないらしい。親睦をはかってくれているようだ。写真をとらせてもらう。そのときもへらへらと笑っていた。前歯が一、二本抜けているのも気にしていない風が、またいい。
　赤っぽいレトロな照明に照らされたビル街はなかなか美しい。そこをひっきりなしに人やバイクが通る。
　ホテルへ帰る道すがら、子供を抱いた若い母親が、「チップ、チップ」としつこくついて来た。五百ドン（五円）渡そうとするが、
「ノー」
　という。
　道を渡ってもついて来るので今度は千ドン（十円）渡す。そして、さっき屋台で写真を撮らせてもらったみたいに
「Can I take your picture please?」
　すると、
「ノー！　ノー！」
　と拒否して行ってしまったのである。

　そやけど、佐伯さん達あの二人と歩いてるときにはこんなにつきまとう連中おらんかったのに、なんでや？　と思っている間もなく、こんどは小さい女の子がチップを要求しながら手を握ってついて来た。というより、手を握って離さない。そのままホテルの前まで来てしまった。車道から、ホテルの玄関まえの歩道にあがると、女の子は歩道に上がろうとしない。
　たぶん、ホテルの職員に怒られるので上がるな、と親にでも言われているのだ。
「カム、カム、プリーズ」
　と言ったが来ず、じっと立っているので、写真を撮らせてもらった。
　車道へ下りて千ドン彼女に渡すと走って向こうへ行くのでもういちど、
「Can I take～」
　というと、また立ち止まったので、二枚写真が撮れたのだった。
「はい、チーズ」
　タンクトップに半ズボンの少女はなかなか可愛らしい。裸足である。少女はカメラに収まった後、道の反対側に走って行った。そこに家族か何かがいるようなかんじである。時刻は夜の十時になっていた。

　ホテルのロビーから外を伺うと、西洋人のおそらく旅行者だろうが、リュックサックみたいなのを背中でなく、お腹の側に抱えて歩いている人が見えた。白人も、ベトナム旅行のガイドブックの『ひったくりに気をつけなさい』と書いてあるのを読んで、そのとおりにしているのだな、日本人と一緒やなと清作は滑稽に思った。

いまの場面をもとにした絵

じっさいには、男の子はいなくて、ひとりでついてきた。舗道にも上がってこなかったのだが、女の子の大きさから、舗道に上げないと入りきらなかったので、こうなった。

4　ベトナム3日目、メコン川クルーズ

　翌朝は添乗員のドンさんが八時か九時だかに迎えに来た。ホテルの朝食をとった三人は、ワゴン車に乗って郊外へ。クチトンネルのときと同じか、それ以上車に乗って、今日はメコン川の川下りをするという。ホーチミン市を出るとき、中華街のまえを通った。世界中に散らばった華僑が、ここホーチミンにも根を下ろしていた。商店街の表示が、模様みたいなベトナム文字ではなく、漢字である。
　相変わらずバイクの洪水のなか、車はホーチミン市を抜け、メコン川へと向かった。
　数時間は走るうち、車のそばを走るバイクのなかには、滋養強壮にいいとかで日本でも見たことがあるが、へびの入ったお酒か何かの瓶を積んでいるのが多かった。日本で蛇を入れた瓶を積んだバイクはあまりお目にかからないが、こちらでは何台も走っている。
　三人乗り、四人乗りのバイクも相変わらずである。車より、バイクが多い。清作達はワゴン車のなかで眠りに入った。

　昼ごろメコン川の河口、ミトーという町に着いた。
　波止場は海のように広いが、メコン川だという。これがアジアを代表する大きな川のひとつなんだなと思った。清作は大阪の人間なので、淀川はとても大きいと思っていたが、かるくそれ以上である。なにしろ、海にしか見えないのだ。
　いつものガイドのドンさんとここでひとまず別れ、メコン川専門の、若い女のガイドさん（名前は忘れた）に交代した。ピーナツ売りの屋台の少女ていうか、はたちくらいになっているんだろうか、そういうひとの写真を撮ったが、彼女はこちらには気づかぬ様子で、屋台の山盛りにした落花生を前に、ベンチの上にあぐらをかいて、休憩している。清作はむかし読んだ、伝説のレーサー、浮谷東次郎の『がむしゃら一五〇〇キロ』を思い出した。
　自分はこんな恵まれた生活のなか、十五歳くらいでバイクにまたがって日本を気ままに旅しているのに、この十歳にも満たないような少女は健気に西瓜を売っているのだ、と、一人旅の途中で出会った、路傍の西瓜売りの少女を見て思う箇所がある。昭和三十年頃か。とても感動的な場面である。
　ところが清作はというと、おれも、しがない介護の仕事毎日しているし、この人は仕事中とはいえ、あぐらかいて休憩してるし、いいなあとか、訳の分からんことを考えているうちに船がやってきた。十数人乗りくらいの、水色の船である。乗り込むと、ガイドさんからココナツジュースが配られた。椰子の実に穴があいていて、ストローがささっている。
　船は広い川を進んで行く。日本の川は水色だが、こちらは水面がうすい黄土色だ。よく晴れていて、風が気持ちいい。しばらく進んで、陸地についた。中州らしい。一行は清作ら三人と、最初だけ空港で一緒だった、同じツアーの若い女性二人組、そしてガイドさんの計六名である。
　途中、キャラメル工場に寄った。中州といってもけっこう広いのだ。メコン川が海に見えるくらいひろいので中州も大きいのである。キャラメルは、日本でも、うどんを打つのを見せるところがあるが、あんなかんじで、大鍋で煮た飴を、うどんみたいに伸ばしたり切ったりするところをみせてくれるのである。清作はいくつか買ったのだが、職場のひとやら友人ら数名にキャラメルを渡したら自分のが無くなったので、その（椰子の煮汁で作るらしい）キャラメルを食べてないので、惜しいことをしたと思う。けちらずに、もっと買えば良かったのだ。
　屋根があって吹き抜けのところでやっている。そばにハンモックがぶら下がっていて、小学生くらいの女の子がそれに乗ってブランコみたいに揺れていた。更に少し歩くと、行商の天秤棒が三種類くらい置いてあって、どれでも担いでよいという。椰子の実が何個かある天秤棒だとか、パイナップルのやら、まくわうりみたいなのやらがある。
「どうちゃん、ほらこういうふうに腰入れて担ぐんや」
　と、田舎育ちの滝井さんは見本をして見せたりする。三人で各々、担いでいる写真を撮りあう。
　ツアーが一緒の若い女性の二人組のほうは、いやにおとなしい。話しかけようかなと思うが、清作はなかなかそのきっかけがつかめなかった。それと、この中州に来ているまわりの観光客も日本人ばかりのようだ。今日がたまたまそうなのか。
　お茶とお菓子の時間を、竹葺きの吹き抜けのレストランでとった。
　更に少し歩くと、小川に着いた。これもメコン川の支流で、ここから川下り、というか、クルージングていうのか。英語でいうほうが格好いい、中身はおなじでも。あらかじめ貰っていたベトナムの編みがさをかぶって出発である。
ベトナムの係員に手引きしてもらい、船着き場から小舟に移る。手をうまいこと引っ張ってもらわないと、川に落ちそうだが、うまいこと手引きするからか、まわりを見ても誰も落ちずに小舟に三三五五、移っている。
　両側を椰子やらそてつやらの生い茂る中州に挟まれた間を舟は下った。舟の舳先には編みがさをかぶって、紺色のチャイナふうのかっこうをしたおばさんが、その後ろには清作、佐伯さん、滝井さんが順に座っており、舟のしんがりには鬚を生やしてアロハシャツをきたおっちゃんがオールを漕いでいる。前にも後ろにも、おなじような川下りの舟が、数メートルおきに続いている。
　三人は、すごいなあとか、わいわい言いつつ、お互いの写真やらまわりの景色を撮っていた。
　清作は、せっかくここ、メコン川くんだりまで来たのだからと、メコン川の水を触ってみることにした。手を伸ばして水面に触れようとしたとき、
「なにしてるねん、汚いやろ」
　と後ろから声がした。
「こんなん、ばいきんがいっぱいやで」
と佐伯さんは言う。たしかに、水面を見ると日本の川のような水色とはとてもいえなかった。泥水みたいな、透明度ゼロの水ではある。
「いや、まあー」
　とか言いながら清作は手を引っ込めた。
　しゃあないなあ、と思いつつなおも舟は進む。
「こんなとこ誰か住んでんのかなあ」
　と後ろで滝井さんの声。右を見ると、中州に、椰子の木に囲まれた木造の掘建て小屋がそびえている。舟に座っていると視界が低いのでまわりの物が大きく見える。
　川を下っていく右側通行の舟と、反対に、客を下流で下ろして漕ぎ手だけになった戻り舟が何艘もすれちがう。　この舟の船頭のおばちゃんもときどき手をあげたりして挨拶しつつオールをこぐ。十五分くらい経ったろうか、舟は河口までやって来た。このあたりはたぶんもと来たところだと思うが、とにかく広い。海みたいである。最初に乗っていた青い中型船に、現地の人に手をひっぱってもらいながら乗り移った。じっさい、上手に手を引っ張るので海みたいな、この川に落ちる人はいなかった。ちょっとこわいけど。

　青い中型船で陸地に上がると、昼食である。吹き抜けの、上に竹か萱かを張った屋根のした、さっきお茶を飲んだところとよく似た屋外レストランの木のテーブルで一行が待っていると、春巻きやらベトナムうどんやらといった、ベトナム料理が出て来た。ライスペーパーという、お米から作った餃子の皮みたいなものもある。野菜なんかをこれで巻いて食べるようだ。メインは、大皿に盛られた茶色い大きな魚の空揚げである。　看護婦の滝井さんは、ホテルの朝食同様、これ食えんあれ食えんと言っている。
「魚は食べれるんとちがうん？」
　と清作が言うと、
「あたしな、さしみは食えるけど、からあげはあかんのや」
「これは、春巻きは？」
「あかん、どうちゃんやる」
　といって、ごろんと清作に転がしてよこした。
「なにこれ、うろこついてるやん」
　と介護の佐伯さんは言う。うろこも取らへんのかと、ふたりで言い合っている。そのうち、アオザイを着た若いベトナム女性がやってきて、怒ってるのではないが、無表情な様子でおかずを切り分けにきた。但し、空揚げの魚はそのままである。からあげの魚は、あとで日本に清作が帰って調べてみるに、象耳魚（ぞうみみざかな）という。象耳魚は、大皿の上に泳いでいる形、つま

りお箸みたいな棒が四本ほどお皿に立っていて、それに挟まれて、魚が泳いでいるかっこうになっている。魚のまわりはいっぱい野菜が取り囲んでいる。
　エレファントフィッシュともいう。エレファントフィッシュていうと、お洒落なかんじがする。
「あたしもいらん、これあげるわ」
　と、佐伯さんも清作に春巻きをくれた。しかし、自分は食べたいけどあげると言うならいいけど、自分は食わんからやるちゅうのも、と清作は思った。しかし、春巻きうまいのにと清作は思う。
　こんどは魚を指差しながら、
「これ、ここの川でとれたやつちがうのん？」
「そうや、そうやで。こんなどぶ川の」
　ふたりはそんなことを言いながら魚をちょっとかじってみたが、もうやめた、と食べようとしないでいる。
　こんなうまいものをと清作は思いつつ、その、象耳魚を少しずつ食べた。ライスペーパーにくるんだりもしてみる。香ばしくてうまいのだ。でも、ふたりに言わせると泥臭くてかなわんという。
「こないだホアさんと行ったとこおいしかったよねえ」
「あそこうまかったよな、こんなどぶ臭い魚とちごうて」
「ああ、あそこか。あそこもうまかった」
　と、清作も相づちを打った。一日目の夜にホアさんに案内されて行った、ホテル近くの中華風ベトナム料理店のことである。でもあれはどちらかというと中華料理店に近いような。
「あんた、なんでも食べられるんやろ、うらやましいなあ！」
「なんで？　うまいやんか」
「もうちょっとゆっくり食べなさいよう」
「どうちゃん食べんの早いなあ。あたしさっきから、野菜しか食べられへんねんで」
「な、なんでえ。食べたらええやん。ほら、うまいで滝井さん。これどうや、これなら食べれるで」
「いらん」
　煙草を吸い始めた。
「佐伯さんも、この魚うまいで。春巻きも」
「もう、ええって」
　ほんまにもう、と清作は思う。ふたりが食べたのは　フォーというどんくらいである。これは香水みたいな、ちょっと独特の香りの野菜が入ったうどんだ。はるばるベトナムまで来て、エスニック料理食べれんでどうするのん？

　そのあと、フルーツのデザートがたくさん出た。ライチやパイナップルのほか、日本では見たことのない、柿に似たものや、小さいバナナなどがある。この小さいバナナは、日本で食べたどんなバナナより旨いくらいだった。
　だいたい日本ではバナナを青いときに収穫するんでないか？　こっちはもっと熟れてからもぐんではなかろうか。だからこっちのほうが旨いんではないだろうか。
　今日は日本人観光客ばかりのような気がするが、三人がフルーツを食べていると、近くで音楽の演奏が始まった。他の日本人観光客がお金を払って、食事をしながら演奏を聴いているのである。ギターを弾いている青年と、歌を歌っている十歳くらいからはたちくらいまでの、三人の少女と、まだ小さい少年と、そして六十才くらいの、胡弓みたいなのを弾くおっちゃんと。三人の少女のうち二人はピンクのと白のアオザイがなかなか美しい。あとのひとらは普段着の洋服である。
　いいかんじなのでお金払ってこっちにも来てもらおうかと清作も思って、相棒のふたりに言ってみようとしたが、話題がそっちにいかないようで、また、音楽は身近で聞こえているし、演奏する姿も近くで見られるし、よそのお客さんのために演奏しているところまで一、二メートル出張して写真をとることにした。清作がそうやってカメラを構えると、胡弓を弾いているおっちゃんがこっちを見て笑った。なかなかいい笑顔だ。
　でもお金も払わんと演奏を聴いて、写真を撮って、なんか悪いなと思ったが、他の日本人のひとが払ってくれてるんだからまあいいかと思いつつ、何枚も清作は写真を撮った。滝井さんも立ち上がってやってきて、フィルムがカメラになっている使い捨てカメラで、必死になって撮っている。佐伯さんもつられて撮りだした。

　メコン川をあとにし、再びワゴン車に乗って三人と、同じツアーの若い女性二人組と、ガイドのドンさんはドライバーの運転で再びホーチミン市へ戻った。若い二人組はこっちの活発さに押されているのかそういうことと無関係か、口数少なくおとなしいし、とうとう清作は、ちょっとした四方山話も出来なかったのを少し悔やんだ。道中、写真を撮ってもらったり、こっちの誰かがふたりの写真を撮ってあげたりということはあったのだったが。

　ホテルに帰って昼寝をし、夕方はフレンチ風ベトナム料理の夕食というスケジュールである。
　昼寝をしてから三人でまた、ホテルから少し歩いて屋台でＴシャツを何枚も買ったり、グッチやらのブランド品ばかり固めて扱っている店を見つけてそこを皆で冷やかしたりした。

　ホテルに帰ってひと休みし、夕方、添乗員のドンさんがやって来る時間になった。ロビーから三人が外に出ると、小学生くらいの少女がやって来た。手にロッテのチューインガムを持っている。滝井さんのほうへ行ったが相手にしないので、そばにいた佐伯さんの手に、チューインガムを握らせようとした。
「あっちあっち、ほら、あの人買うで」
　佐伯さんはそばの清作を指さした。
「あかん、あかんっ」
　清作はガムを握らせられないように、手を固く握りしめた。
「ねえ、買ったげなさいよちょっとくらい。こづかい余ってんのやろ」
「ええーっ、そやけど。…、佐伯さん、ほら買うたげたら？」
「一万ドン」
　と日本語で少女が言った。
「一万ドンやて！」
　と佐伯さんが笑った。約百円。市販で買うより高いやないか。少女は清作のほうへガムを差し出してくる。身なりは悪くない。タンクトップに、半ズボンだったかスカートだったか。
「どうちゃん買うたりいな」
　滝井さんまで言う。
「も、もうー、しゃあないな」
　悔しいので五千ドンにまけさそうと、五千ドン札を渡そうとすると、受け取らないのだ。
「ほら、この五千ドン」
　というが拒否する。
「もうー、ほんまに」
　一万ドン渡すと、道の反対側へ逃げて行った。
　ワゴン車がやって来た。ホテルのまえに停車すると、ドンさんが降りて来た。清作ら三人が車に乗ろうとすると、こんどは別の少女がやってきた。手にチューインガムを持っていて、また清作のほうに寄って来る。
「あかん、あかんて」
　ようやくのことでチューインガム売りの少女の手を振りきり、車に乗った。
「どうちゃん買うたったらよかったのに。そやけどあのふたり目の女の子、なんで、どうちゃんのほうへまっすぐ来たんかな？」

「あのひとすぐ買うで、て最初の子に教えてもらったんやで」
　と、ワゴン車の前の座席でふたりで笑いあっている。なんでこのふたりには、押し売り来んのか？　と清作は思う。

　少し走ってワゴン車は、ホテルのようなところに着いた。高いビルで、屋上にエレベーターで上がった。飲み物は各自持ちだという説明をして、後ほど来ますと言い、ドンさんは去って行った。
　アオザイを着た若いウエイターがふたり、出迎えてくれた。男性用のアオザイもあるのだなと清作は思った。呼び方は違うのかもしれないが。この屋上には大きなクリスマスツリーが置いてあり、周りを取り囲んだ柵にもクリスマスの飾り付けがしてある。こういう南国にもクリスマスのお祝いは浸透しているわけだ。
　陽も落ちて、ディナーというかんじがしてきた。白いテーブルクロスの上に、ウェイターがキャンドルの火や、そして料理を運んで来る。しかし十万そこらでこういうサービスまでついてるとは、安いとしかいいようがない。パンやワイン、スープに海鮮料理を食べながら眼下を見渡すと、サイゴン川を航行する船と、広い通りを行き交う車のヘッドライトが帯になっていて、夜景がすごくきれいだった。清作はフィルムを使ってしまって、なかったので、滝井さんのフィルムがカメラになったやつを貸してもらい、写真を撮った。一眼レフにフィルムを入れていたらなあと思った。
　ホテルに帰ってくると、行きしなにやって来たひとり目の少女がまたやって来てチューインガムを売ろうとする。
「また来た！　ほら、あのおっちゃん買うてくれるで」
　と佐伯さんは笑いながら、清作のほうに少女を追いやった。
「あかん、あかんて」
「どうちゃん買うたりいな、けちやな。お金持ってんのやろ」
　と滝井さんも言う。
「なんで、おれもう、買うてるって。滝井さん買ったりいな」
　そのうち、ふたり目の少女も来た。
「ほらほら、このおっちゃんようけ買うてくれるで」
「一万ドン」
　と少女が言った。
「一万ドンやて」
「ちがう！　どうせこんなもん、近くのスーパーでロッテのガム買うて、玄関前で待ち構えとって、定価以上で買わしとんのやろう？　腹たつなあ」
「どうちゃん、よう知ってるやん」

　ホテルに戻って、滝井さん、佐伯さんの泊まっている部屋の窓から表通りが見下ろせるので、通りを見ると、道路を挟んで反対側に何人もがたむろしていて、そのなかにあの少女らもいた。親らしき大人もいるもようだ。
「まだ居るでえ、遅くまでおるんやな。ずっとあんなことしてんのかな」
「ほんまやな」
「ほんーまに、しつこかったなあ。おれもう、いらんのに何個も買うたでほんまにい」
「あんた何個買うたん？　わ、こんなに買うてるわ！　堂山さん、カモや思われてんねんで、わはははは」
「どうちゃんスキが多いからや。ほら、あたしらのほう来んかったやろ？」
　よく言うなあ、けしかけておいて。などとも清作は思った。

5　ベトナム最終日、4日目

　フランス料理のディナーを食べて夜景も見られたが、そうしてお互いに記念写真など撮って良かったが、清作はまだ単独行動し足りなかったので、
「ちょっと明日はあ、日本に帰ってから絵を描くためにちょっとね、朝、写真を撮りに行ってくるわ」
　とふたりに言った。こんなこと言わなくてもと思うが、また翌る朝、どっか行こうよ、案内してよなどと言われてもなと、先手を打ったのであった。

　最終日四日目は、終日自由行動の日で、夜十一時半にホーチミンを発つのでたっぷり時間はあった。
　荷物は夜までホテルで預かってくれるが、昼頃にはホテルをチェックアウトせねばならなかった。そこで、最初、ホアさんに案内してもらった日に、最終日の午後にもまた町案内してもらう約束をしていた。
　じつは前の晩、ホアさんからホテルの清作へ、律儀というか、とんでもない電話がかかっていた。

ホーチミン市の朝

　その話はあととして、ともかく、ひとりでうろちょろしておくのは今日の朝しかないと思い、きのうあのふたりにも言っておいたことだし、朝は苦手だったが、日本から持って来た大きな目覚まし時計を鳴らして、八時ごろにはホテルを出たのだった。
　ところで前の晩、滝井さんが部屋に訪ねて来てなにかとりとめのない話を長々としたのだった。楽しかったが朝になると話の内容を忘れてしまった。
　サイゴンホテルを出てドンコイ通りを右へ行き、市内中心部へ、いつものとおり行った。おそらくレロイ通りというのだろうが、その目抜き通りに出ると、噴水のある広場がある。そこで三人でいたとき、魚の形のお菓子の行商のおばさんがやって来て、やがて売れないので退散していったのだったが、またあのおばさんに会うかと思ったが、いなかった。
　周りを見回すと、レトロなビルが多い。バイクがひっきりなしに走っている。なんの用事があるのか、昼も夜も走っているのだが、あとで日本に帰って分かったが、暑いので風で涼むために走っているらしい。
「なにを走ってんのかなあ？　用事あんのかなあ」
　と、佐伯さんらはいぶかしげに言っていたが、やはり用もないのに走っていたのだ。用や仕事のひともいるだろうけど。に比べ

、やっぱり日本人は働き過ぎだと思った。この先、生きて何度海外旅行できるだろう。いや、国内でもいい、これから何度、仕事でない旅が出来ることか。
　などと感慨にふけりつつ元来た道を戻る。すると、道案内しようという人力車みたいな、シクロという乗り物のドライバーが、しきりに誘って来た。
「いや、まあー」
　と言って断る。少し歩くと、信号待ちしているときに新聞売りのおっちゃんがやって来た。見ると日本の新聞である。なんだったか、いわゆる四大紙のうちのどれかだった。二、三種類あったかも。新聞を買い、なおも歩くと、また別のシクロドライバーがやって来た。片言の日本語を使い、手帳を彼は見せた。そこには日本人の名前がいくつも書かれていて、
「お世話になりました」
　という挨拶まであった。わたしのあんないは、やすいよ、などという。
　中肉中背の、中年男性のドライバーである。
　うーん、もし俺がひとりなら、乗ってやってもいいかなあ？　この、怪し気ではあるが、ひとが良さそうでもあるシクロドライバーのシクロに乗って、ホーチミン巡りするのも悪くないか、とも思ったが、ガイドブックには、乗るなとまでは書いてないが、シクロは料金トラブルが多いとも書いてあるし、なにかあったとき、あのふたりに、
「なにやってんねん、ほんとうに」
　などと言われるかもしれず、断った。
　またしばらく歩いて（とはいっても、ホテルから市内中心部の広場までの三百だか四百メートル四方を、ぐるぐる回っているだけだが）、屋台のＴシャツ屋でＴシャツを見たりしているうちに、清作はカメラでいろんなものを撮っていたからか、ひとがまた何人も寄って来て、若い、高校生くらいの青年が、清作の肩からぶら下げているカメラをぐいと引っ張った。
「ああーっ、ほんまにい」
　笑いながらその青年は去って行ったが、カメラかっぱらわれるかもしれなかったと思うと、冗談でやったのかもしれないが、かなわんと思う。用心せねば。
　被写体を探し、なおも歩く。ホテルへ帰る道、ドンコイ通りでアイスコーヒーの屋台を見つけた。佐伯さんや滝井さんと歩いていたときは、アイスコーヒーの屋台を見つけて、
「飲もうか」
　と言っても、
「お腹こわすって」
　と言われ、少々不満だったので、ガイドブックにも生水には気をつけましょうとあったけれど、反動からか清作は、屋台でアイスコーヒーを頂くことにした。母親と息子でやっているらしい屋台である。しゃがんでコーヒーを飲む。日本で飲むコーヒーに比べ、水分が少ない。
　ガラスのコップに氷がいくつも入っていて、そこにシロップのようなコーヒーが注ぎ込まれているのである。日本で飲むのは、ジュースみたいな液体だが、ベトナムのアイスコーヒーはどろっとしてるんである。でも、ちゃんとお砂糖も入ってるし、美味しかった。立ち上がって行こうとすると、
母親らしき人が、さかんに切手帳を見せて、
「五万ドン」
　放っとくと、二冊も三冊も清作の手に握らせてくる。中身はベトナムの風物、鳥とか蝶とか、花、偉人（ホーチミン氏その他）、女性、楽器など。色もきれいではある。でも二冊も三冊も、似たようなのはいらんし。
「わ、わかった。一冊だけ買おう。アイ、ウィル、バイ、ディスワン」
「十万ドン」
「ええっ？」
「ア、コメナサイ、コメナサイ、五万ドン」
　五万ドンでもぼったくりみたいな気がするが、もう今日が最後だし、五百円くらい買うちゃれ、と切手帳を買う。そしておばさんの写真を撮らせてもらった。足が悪いようで、松葉杖をつきつつも、ポーズしてくれた。
　ホテルに戻ろうとすると、さっきから天秤棒を担いだ少年が、ずっとついてきていた。ココナツジュース売りである。メコン川クルーズのとき飲んだが、ココナツ、つまり椰子の実の表皮をむいて、そこに穴を空けてストローをつっこんだだけの飲み物である。片一方の天秤にはかごがぶら下がっていて、ココナツが数個載っている。もう片方の天秤には大きな箱がぶら下がっている。おそらく氷で冷やしたココナツ＝ココ椰子がどっさり入っているのだろう、重そうである。彼からココナツジュースを一個買い、飲みながら、
「重そうだね、イットなんとかヘビー」
「チップ、チップ」
「ええっ」
　歩いても歩いてもついて来る。道を間違えてしまった。ホテルがあるはずの通りに、ホテルがない！　もうー、この少年のせいで勘が狂ってしまった。もういちど考え直し、道をくるっとまわり、もと来た道に戻れた。少年にチップを渡し、何枚も写真を撮らせてもらう。愛嬌のある顔は、しとるけど、と清作は思った。
　食堂なんだか普通の家なんだかわからないかんじの、家の外に食卓を出して食べているところが何軒かあった。めいめい、うどん（フォー）なんかを食べたりしている。

　ホテルの部屋に戻った。清作は、きのうのホアさんからの電話のことを考えていた。ホテルのフロントから、夜の九時頃、清作の部屋に電話があった。ホアさんからの三人への連絡先を、清作の部屋にしていたのである。
「ホアです。こないだのおみあいのことですが」
「えっ、なんて？　あっ、ホアさんですか、こんばんは」
「ホアです。こないだのおみあいのあいて、みつかりました。あんたべとなむじんしょかいしてほしか」
「ええっ？」
　また返事しますと言って電話を切り、向かいの部屋に報告をしに行った。
　律儀というか、ばか正直というか、このあいだ、冗談半分にこのふたりが『ええひと紹介してやってえな』とひとことふたこと言っただけのことを、まじめに受けて探してくれまでしたのだ。えらいことになった。
「へえー、堂山さん良かったやんか」
「どうちゃん良かったなあ」
「え？　ま、まあ」
「堂山さん、うまいこといったらベトナムまで結婚式呼んでな」
「そうやで。うまいこといったらあたしら呼ぶんやで。もちろんどうちゃんの旅費持ちで」
「そらそうやな。佐伯さんと滝井さんのおかげやもんな」
　なんだかちょっと、面倒くさくなってきてもいた。だいいち自分の意志と無関係に話が進んでしまったような。でも、動き出した舟でもあるし。

　これがきのうの話である。いまは清作はホテルのふたり部屋をひとりでうとうとしながらベッドに寝転がっていた。
　昼ごろふたりに誘われロビーに下りると、じきにホアさんがやって来た。原付バイクでやって来たもようである。
「じかんがなかったので、たくさんみつけられませんでした」
　とホアさんは言った。三人いるという。三人も見つけてくれたのなら十分である。
　清作達一行は、サイゴンホテルから歩いて、ホアさんの店に行くことになった。ホアさんの旦那は清作らの勤める病院の総婦長の旦那さんが経営する、貿易会社の社員であるという。
　ホアさんの夫はいまはちょうど、清作達と反対で、仕事で大阪の総婦長夫婦の家に滞在しているということだった。
　十五分ほど歩いて、大きなショッピングセンターが見えてきた。なんでもロシア人が経営しているらしい。このショッピングセンターのなかに、ホアさんのお土産屋があるという。そして、清作のお見合い相手もここにいるというのだ。
「どうちゃんどきどきしてきたやろ」
「そ、そうやなあ。あっ、お見合いのときね、おれ、ひとりでするから。いいよ、ほんとに」
　つまり、照れくさいというか、自分でもよく分からんが、お見合いにふたり、わざわざ立ち会ってくれなくていいよ、という意

味で、清作は言った。
「立ち会うで、かまへんで」
「堂山さん何いうてんの、あたしら立ち会ってあげるで」
「あ、ありがとう」
「あたしらのおかげやで、ほんまにい。どうちゃんよかったな」
「よ、よし、感謝のしるしにお昼はおれがおごる！」
　たぶん二千円くらいで済むだろう、ホアさん入れて四人分でも、などとせこいことを考えた。

　アーチ型の洒落た天井のショッピングセンターに着いた。ここにいろんなお店が入っている。ホーチミンの町中によくある屋台と違って、日本のショッピングセンターとおんなじようなかんじである。まず入ってすぐ、一軒の雑貨屋があって、そこにひとりの女の人が座っていた。おばさん風のそのひとがひとり目で、そのひとは気づかぬふうで、うつむいて手仕事をしている。
「これがひとり目のひとです」
　とホアさんが言うなかを三人は通り過ぎた。うーん、どうしようかなあ？　と清作は思った。ふたり目はむこうの店にいると言う。
　ホアさんの店に着いた。小さなそのお店に、ベトナムの骨董品や民芸品がところ狭しと置いてあった。
「あ、来ました来ました」
　とホアさんが言った。なにも用事がないのに、ホアさんの店の前までやってきたふうの女性がいた。赤いパンタロンをはいて、派手めなかんじなひとである。そのひとは、すぐに戻って行った。ちょっとちゃうかなあ？　と、清作は贅沢にも思った。
「あのひとはロシアにはたらきにいって、こどもができたので、わかれて、ベトナムにかえってきました」
　とホアさんは言う。じつは三人目のひともそうだという。なんやそれ？　と清作は思った。ベトナムの女性が悪いのでなく、おそらく出稼ぎに行って、お腹大きくなったら別れたというか、逃げられたというか。ロシア人いいかげんやなあ、と思った。しかも、このショッピングセンターもロシア人がやってるのか？　ロシア人に頭上がらんやん、悔しいなあ。清作は個人的にはロシアのこと嫌いではないが、かなわんなあと思った。でもそのロシアにワールドカップで日本は勝って、ロシアで暴動が起こり、死者まで出たのか。その死者も気の毒といえば気の毒だ。（日本に帰り、ずいぶんあとで、じつは、ロシア人は無関係で、だんなはベトナム人だということがわかった。ホアさんは、日本語がかなり達者とはいえ、日本人ではないのだから、伝わらない部分もあるわけだ。でもいまは、日本人でさえ、ちゃんと相手に伝わる言い方ができない人間が増えているような。）

　滝井さんらも、どうやった？　などと清作に聞きつつ、ホアさんの店と、ほかの雑貨屋でショッピングし始めた。清作も、買い物することにした。ホアさんの店で清作は磁石（コンパス）つきの、木製の亀の置き物を買った。手のひらに載るくらいの大きさである。
　亀の上半身のふたを開けると、コンパスが出て来て、十二支のえとの動物の絵が、コンパスをかこんでいる。昔から方角は運勢を占ううえで大事な要素であったようだ。中国と似ている。自分の未来も、この亀が羅針盤のように照らしてくれたらよいのだが、と清作は思った。だいぶ定価から勉強してくれるという。今日のお見合いの三番目のひとも、このかめのおかげでいいひとやったらいいのだが、千円くらいの亀では駄目か。二千円だったかもしれないが。
　ホアさんが清作に、
「わたしのだんなにこれ、わたしてください」
　という。見ると、ベトナムのお酒と、日本のマイルドセブンと、あとなにか雑貨が少々。もう一、来しなも荷物運びしたが、またか。でも、たばこ、日本にいる旦那さん、マイルドセブンくらい買えるだろうに。
　帰国してから分かったが、お金に困っていたようだ。給料が、まだ貿易会社が軌道に乗っていないせいで安く、総婦長夫婦、つまりホアさんの旦那からいうと社長の家に居候させてもらっているので遠慮もあり、お酒やたばこといった日用品も、こちらから送ってやっていたという夫婦愛。頭が下がるのだ。

　清作が、なにか、ええーっ？　というような愚痴を言い、佐伯さんらが、
「なに言うてんのよ、やったりなさいよもう」
　と言い、
「およめさんしょかいしてほしやろ、もっていってよう！」
　とホアさんまでが大声を出す。
　おかしい。最初会ったとき、ホアさん低姿勢で謙虚だったのに。夕食を町案内のお礼に三人でおごったときも、すごく丁寧な態度だったのに。
「やったりなさいよ！」
　と佐伯さんが言った。
「そやそや」
　なんとなく、滝井さんも言う。
「荷物がかばんにはいらんやろが！　お酒、関税かかったらどうするん、ちゅうようなこともあるし。ま、まあ入れるけど、そらみてみろ、あんたらがおちょくるんで、ホアさんまで、真似てきたやろうーっ」
　しばらくの沈黙ののち、佐伯さんが、ふんっといった、笑いをこらえるような顔をして、そのあと、何ごともなく。

　同じショッピングセンターの、ホアさんの店と似たような、しかしホアさんの店が骨董品だったのに対して、竹細工の店というかんじのところにやってきた。そこの、ちょっとだけ小太りの、愛嬌のある顔と態度のひとが、三人目だった。
「こんにちわ」
　ほかにも何か、一生懸命相手してくれようとしている様が見え見えである。しきりと話しかけてくる。
「どこからきましたか」
「大阪です」
　清作が少し話すと、日本語勉強中だが、まだよく分からないらしく、会話が途切れた。三十三歳だという。清作は年令を適当にあいまいに言い、
「まあ、そんなとこかね」
　と言った。アンさんというその人は、その竹細工のお店で働いているのだが、今日は仕事を抜けて付き合ってくれるという。
「悪いですねえ」
　と清作たちは言った。
　一行は、ここから昼食に向かうことにした。その日買ったお土産のせいで、三人の手荷物は、またもやてんこ盛りになっていた。その荷物を手分けしてアンさんも持ってくれると言う。十分ほど歩く。行く前に斉藤という名のご老人が出てきた。ホアさん一家と親しいという。
「日本は物価が高い。わしはベトナムで余生を過ごすことにしました。家も食べ物も安いしね」
　普段着のベトナム人みたいな、ラフな格好をしている。行く道の途中で、斉藤老人はどこかへ去った。ひとりで暮らしてはるのかな。

　ホアさんの案内で、とあるベトナム料理店に着いた。アンさん（お見合い相手）は、おかゆだけでいいと言う。
「なんか、宗教上の理由ですね」
　と清作が聞くと、
「いや、あのう」
　小太りなんで、そのせいなのか？　ベトナムの社会は日本とさして違わないような気がした。大昔インドへ短期間行ったことがあるが、神聖な牛は、車の走る町中にもうろうろしていたし、ちょっと日本とは風俗習慣が違っていたが。ところでベトナムの人は、黒髪が美しい。ホアさんもアンさんも、そのままの黒髪である。
　海老やら野菜やら春巻きやら、ベトナム料理は新鮮で美味しい。注文するまえ、佐伯さんが
「ねえホアさん、このまえのホテルの近所のお店で食べた香菜、なんていうの」
「え、どんなですか？」

「ほらほら、あったじゃないの」
ホアさんはしばらく考えていたが、どこかへ行った。と思ったら、厨房から出て来た。手に草を握っている。
「これですか？」
　厨房にまで行って、サンプルを持って来てくれたのだった。フォーというベトナムうどんに、日本人にとっては香りが少々きついが、いい匂いのする野草が入っている、それである。
　みんな　ビールも飲み、たらふく食った。アンさんは、少し控えていたようだが。
　会計は二千円少々、五人でこの値段は安かった。
「どうちゃんごちそうさまー」
「堂山さんごちそうさま」
「え、ええよええよ」
　お見合い（のようなもの）が済んでもアンさんは付き合ってくれることになった。ホアさん、滝井さん、佐伯さん、アンさん、そして清作の五人は、まえ行ったベンタイン市場へ向かった。でもなんだか、重い荷物を両手に持って、いちばん後ろから、それもなんだかふらふらとついてくるアンさんが、ちょっと気の毒になってきた清作だった。べつに誰が悪いわけでもないが。
　それも済み、アンさん、ホアさんのショッピングセンターに戻ってきた。
　ホアさんの店で清作はホアさんと喋った。あとのふたりは、少し離れたベンチで四方山話などしている。
「どでしたか」
「なかなかいい人ですね。いま考え中です」
「こんかいはあ、じかんがなかったので、あまりしょかいできませんでした。こんどは、こどもいないひとしょかいします。というのはあ、こどもいるけど、いちどりこんしたひとは、わるいい、ひとです」
　とホアさんが言っているときに、アンさんがやってきた。ホアさんの店でお箸を何本も買い、清作ら三人にあげたいという。
「や、ありがとう」
　と清作は言った。するとアンさんは、日本に持って行ってほしいものがあると言う。紙に包んだ、日本語をベトナム語に訳した和越辞典（というのか？）である。妹が三重県に住んでいるので、と。
　アンさんとそこで別れ、夜はホアさんと計四人で屋台の食べ物屋を見てまわったあと、まえ行った中華風ベトナム料理店に入った。ここならふたりも食べられるようだ。とくに滝井さんは、よそでは食べ物がほとんど口に入らなかったようである。
「どうちゃん結婚式招待してな」
「そうなったらええなあ」

　旅行会社のドンさんと、同じツアーの若い女性ふたり組と、清作ら三人をのせたワゴン車はホーチミン市の国際空港に着いた。挨拶してドンさんともお別れだ。ドンさんの旦那は日本人だという。だから日本語がこんなにうまいのだな、と清作は思った。
　午後十一時半、ベトナム航空機はホーチミンを飛び立った。何気なくＴシャツで乗り込んだが、佐伯さんらの勧めで、持って来ていた長袖ジャケットを手荷物に入れて座席に持ち込んだ。関空に着いたのは午前六時半で、十二月の日本の早朝は、流石に寒かった。降りるまわりの乗客を見ても、半袖はひとりもいない。　ジャケット持ち込んで正解だ、危ないところだった。こういうところがあかんのだ、ほんとうにい。
「寒いなあー、日本は」
「寒いなあ、あたし明日、仕事やねん」
「おれもや、じゃあさようならあ」
「さようならあ、楽しかったな」

　めいめい別れた。

6　エピローグ

　ひと月ほど経ち、聞き慣れない伝言メモが、清作の携帯に入っていた。
『こんにちわあ、ベトナムじんマイです。またあ、でんわぁ、しました』
　数日後、また伝言メモがあった。
『ベトナムじんマイです。ホーチミンでわあ』
　伝言はそこで終わっていたが、やっと分かった。アンさんの三重県に住む妹、マイさんからだった。辞書を送るとき、清作は、自分の携帯電話の番号も、書き添えていたのである。
　マイさんの友人の、同じ年頃のベトナム女性とふたりで大阪に来たときに新大阪駅で会ったり、つぎにまた大阪のその友人のところへ来たときの帰り、会って、清作は彼女に立ち食いうどんをおごってあげたりもした。ほんとうは、大阪にあるベトナム料理店でおごったげようと思っていたのだほんとうに。しかし三重県まで快速電車と各停を乗り継いで帰る為、午後三時ごろ大阪を発たねばならず、時間がなかったのだった。でも、立ち食いうどんてなあ、外国人をもてなすのに。
　そんないきさつの後、清作は、マイさんのところへ泊まりに行くことになった。電話でその前、やりとりした。
「ええとう、あのうー、泊まるとこあるのかな？」
「あるようー」
　という。いいのかなあ？　じつはマイさんは研究所で働いていて、複数のベトナムの、同じ年頃の女の人らと暮らしているという。家賃はただだけど、給料は手取り十三万だとも言った。

　ある仕事を終えた日の夕方、行くことにした。次の日は休みである。デパートでまんじゅうなどのおみやげを選んでいたら、すぐに時間が経ち、大阪駅を出るころは七時になっていた。
　滋賀県の草津まではわりあい早く来れたが、そこから支線に乗り換え、また途中の駅でディーゼルに乗り換える。ひと駅ひと駅がやたらと長い。次の駅まで平均三十分くらいに思えた。そして、まわりの景色はまっ暗で、銀河鉄道の夜みたいなかんじだ。ときどきシグナルの明かりや、ちんちんという音が聞こえる。なかなか着かない。
　ディーゼル車は長いこと走って、とある駅に着いた。駅前に一台停まっていたタクシーに乗って、三十分くらい走り、着いたのは九時をかなり過ぎていた。
　出迎えを受けアパートに入ると、皆で手分けして鍋で煮炊きをして、ベトナム料理を作っている。そのあいだ、お風呂に入っていてねという。四人はもう入ったらしい。ダイニングキッチンを入れて三部屋あるアパートは、けっこう小奇麗でゆったりとしているが、四人暮らすのはやっとだろうなと清作は思った。休みの日は、お店はスーパーが近所にはあるが、ほかに行くところもないし、たまに日本人の友人の車で町に連れて行ってもらうこともあるが、ほとんどは家のそうじをしているという。テレビもあったが、ラジカセからはベトナム音楽のＣＤが流れていた。
　風呂から上がるとごちそうが出て来た。春巻きにフォーに、炒めものに…、ビールも出してもらい、そこで自己紹介が始まった。マイさん、ロアンさん、ホアンさん、ホンさんの四人。　研究所というが、出稼ぎのようだ。有名電気メーカー各社の部品製造の工場らしい。田舎もいいところの、ここのアパートから毎朝、八時半に家を出て、夜はけっこう遅くまで働いているという。
　食後はパイナップルやらと共に、アイスコーヒーが出た。ネスカフェかなにか、インスタントコーヒーから作ったみたいだが、いやに濃い。それをグラスのなかの氷に注いでみんな、飲んでいる。ホーチミンで飲んだのと、おんなじような味だった。
　四人は皆、ホーチミン出身だという。マイさん以外は、日本語がいまいち通じにくかったが、こんばんは、などと言って食べ物を進めてくれたりした。そして目が合うと、笑ってくれたりした。マイさんの通訳で、清作が勤め先のことなどを話すと、ほうー、と彼女らは感心したりもした。

　彼女らは明日も仕事なので、おやすみなさいということになった。もっと話（あまり通じるわけではないが）したかったが、仕方がない。が、しばらくしてマイさんがまたやってきて、四方山話をした。
「またおねさんに、でんわかメールしてください」
「はいわかりました」
「ホーチミンは、どでしたか？」
「楽しかったです。あなたのお姉さんには、お世話になりました」
「そですか」
　じつはお姉さんも日本に来たがっているという。そうして、また親しくしてやってくださいという。
「たいへんだねえ」
　と清作は言った。
　たぶんマイさんは、清作になにか助けてもらいたいことがあるんだろうなと思った。
　でなけりゃこんなおっさんに親しくしてくれる筈がない、こんなはたち前後の、田舎っぽいけど可愛い女性が。でもともかくいまは、ベトナムの人達と親睦楽しもうと思った。

　彼女らは八畳くらいの部屋に四人寝て、清作はそのとなりの、畳の部屋にふとんをしいてもらって寝ることになった。
　ベトナムのときもおんなじようなことになりそうで、結局一人部屋にしたが、こんな若い女性四人の寝ている部屋のすぐ隣で寝るというのも、不思議なような。いいのかなあー？　みたいな。でも、いいのだろう、気にせんこっちゃ、と清作は眠りについた。大阪からケーキやまんじゅうのお土産を持ってきて渡したが、気にいってくれたかなあ、などと思いつつ。

　翌朝八時頃、ダイニングキッチンがざわざわしている。また起きて、彼女らは料理を作っているようだ。ベトナム語のやりとりが聞こえる。
　のそのそと起きてダイニングキッチンに入り、
「おはようございます」
「おはよございます」
　サンドイッチを皆で食べたあと、長いこと、昨晩から仕込んでいたベトナム善哉（ぜんざい）を食べることになった。前の晩から仕込んだあずきを、今朝はココナツミルクとお砂糖でぐつぐつと煮込んでいる。マイさんがいちばん料理が得意のようだ。いちばん活発なかんじでもある。あとの三人は、おとなしそうである。いかにもアジアというかんじの、昔懐かしい雰囲気のひともいれば、あのホーチミンのサイゴンセンターのレジにいた、エキゾチックでちょっとあかぬけた感じのひと（ほど色っぽくはないけど）みたいな、なかなかのひともいる。日本人より少し小柄で、高校生みたいに見えないこともない。ようするに、けばけばしくないのだ。
　彼女達の出勤時間、八時半が迫ってきた。もう八時二十分ちかくである。食べる時間がないので、水筒に善哉を詰めてくれることになった。お土産だという。
「仕事間に合う？　もう時間ないねえ」
「すぐきんじょだから、だいじょぶです」
　みんな、茶色っぽい工場の制服に着替えた。ひとりの、ちょっとエキゾチックなひとが清作に、
「いただきます」
　と言っておじぎをした。
「ちがう、ちがう、『いってきます』」
　ほかの人らが訂正する。
「ああっ！　いってきます」
　慌てた笑顔がすごく可愛らしい。

　雨のなか、それぞれ自転車に乗って、四人手を振って出て行った。清作も一緒に家を出た。こんなとこ、よそのひとが見たら、この辺で見たことのないおっさんが、ベトナムの娘さんらのとこに、泊まりよったて、なるんだろうな。ご近所はうるさいからなほんまにい、とちょっとひやひやしたが、何ごともなく。
　その後、あんまりなにもない。清作は、もっと若けりゃなとも思うし、いまのままでなんとかやっていこうとも思うし。ともかく、あのあと大阪に帰って、水筒に入ったベトナム善哉を食べたら、甘くてすごく美味しかった。で、全部その場で食べるのが勿体ないので、残しておいて、うっかり二、三日置いといたら、味が変ってしまっていた。なにごともタイミングを逃すとだめなんだな。ベトナムの善哉、美味しかったよう、と清作は思った。

ホーチミンの魚市場

あとがき

あれから10年以上が経ち、最初に書いた、天王寺駅の陸橋は、いまもあるにはあるが、物売りは禁止になっており、あのネパール人の兄ちゃんも今は、どこに行ったのやらである。
また、陸橋もずいぶんと作り替えられて、なんと、ハルカスなどというものさえ出来てしまったのであった。
当時の総婦長も転職され、仲間のうちの佐伯さんも転職され、というか、私の職場が病院であること、介護の仕事をしていることなど、ろくに説明ないまま、どんどん話が進んで行ってて、これでいいのだろうか果たして、などと思った。その他説明不足な箇所もあろうかと思う。
レートも平成14年当時の100ドン1円から、現在平成28年は、200ドンが約一円と変化している。知らない間にいろんなことが変化するのである。

ところで、これで話終わったはずのホーチミン善哉の続編が、現在執筆されているという。舞台はハノイおよびハロン湾サパその他であるという。
乞うご期待。
（平成28年8月）

著者近影（左手前、ホーチミンのレストランにて。国営デパート(トゥーン、サタック)の人たちと）

VIET
Kitch
Hoak

ホーチミン善哉

http://p.booklog.jp/book/108838

著者：marudo88
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/108838

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/108838

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ